

宮寺「重關茶場碑」について

| | | | | | | | | | |
|------|------|----|-------|------|------|------|----|------|-----|
| 整理番号 | 入間〇二 | 題額 | 重關茶場碑 | 題額揮毫 | 松平定常 | 碑記撰文 | 林煒 | 碑記揮毫 | 卷大任 |
|------|------|----|-------|------|------|------|----|------|-----|

| | | | | | | | | | |
|----|-----|-------|----------------------|----|-------|----|-------|----|--|
| 鐫刻 | 窪世昌 | 撰文建碑年 | 一八三二・天保三 一八三六・天保七 | 住所 | 宮寺南中野 | 場所 | 出雲祝神社 | 備考 | |
|----|-----|-------|----------------------|----|-------|----|-------|----|--|

一 はじめに

埼玉の地にはかつて河越茶があったが、その後茶業は廃れた。その後文化文政期に狭山宮寺郷の村野盛政らが再興をはかり、およそ三十年後には、茶業を営む者が数十戸に達するという隆盛を見た。そこで茶業家達が、先達である村野らの功績を顕彰しようとして、宮寺の出雲祝神社境内に造立したのが、「重關茶場碑」である。頌徳碑であるが、産業碑であるともいえる。

狭山の茶業に関する石碑は、この碑の他に、同じ宮寺に一基、金子地区に二基、東京都瑞穂町に一基あり、碑記の無い石碑が、青梅市と川越喜多院にそれぞれ一基ある。本石碑は、それら茶業碑群の劈頭を飾るものであり、石碑群作成を誘発したものである。

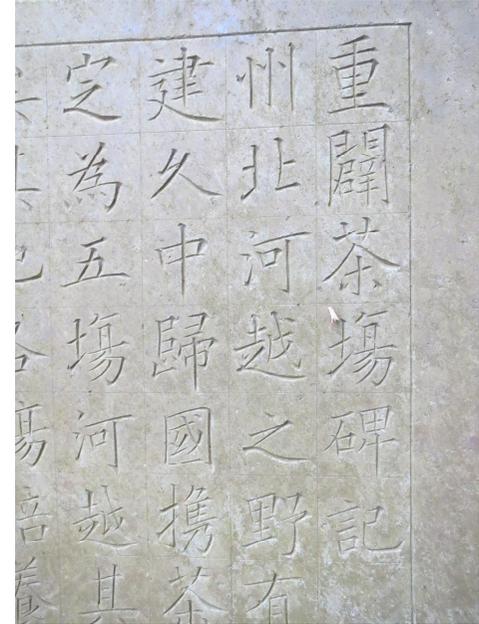
○写真1 石碑正面



○写真2 題額



○写真3 「碑記」部分



二. 翻刻と訳注

■ 翻刻

(正面)

● 題額 (隸書体)



重關茶場碑記

前縫殿頭松平定常題額

州北河越之野有狹山跨于多磨入閒二郡古出名茶傳言釋榮西嘗入宋逮建久中歸國携茶種始蒔之筑前背振山至其徒高辨普殖之畿道相地之宜定為五場河越其一也然而歲月之久茶戶衰替佳種蕪沒於灌莽深荊之間矣其他各場培養失法製亦不精惟宇治擅其名為諸州之冠而已逮文政中鄉之著姓村野氏盛政吉川氏温恭與江戶山本氏德潤冒議重關場于狹山之麓欲以興數百年之廢鄰曲為之隨種者數十戶用力培植逐次蕃滋歲收若干斤佳稱日著製益精絕而狹山之產復再彰於今云屬者鄉民介上田文吉需予記其事予素有陸盧之嗜心喜其舉乃謂茶之為物蘊風露清虛之粹鍾雲山竒秀之精滌昏破悶驅睡解醒滋味甘香其功不為少羅景倫曰於務學勤政未必無助蘇子瞻曰煩膩既去而脾胃不凡二公之語洵為知言然則不特風騷之賞雖紆青拖紫之輩亦不可一日無此味也豈與彼種秫釀酒令

人華狂而葉病者可同日而語哉自今以後一鄉子孫承繼不墜益殖其產則
 狹山之種將不讓宇治而三人者之名亦與谿山共傳悠久也不疑已抑夫土
 宜之興廢雖隨時而變然人力之勤惰實參存於其閒焉吾未知今日之舉果
 為永傳乎若其必欲永傳也則蓋在為其子孫者以人力保之矣姑識歲月以
 俟

天保三年龍集玄默執徐清和月

林煒撰文

卷大任書

窪世昌刻

*異体字等

- 場 場。 ○疋 疋。 ○菅 菅。 ○久 久。 ○國 國。 ○宜 宜。 ○歲 歲。 ○於 於。 ○本 本。 ○胃 胃。
- 稱 稱。 ○再 再。 ○奇 奇。 ○昏 昏。 ○景 景。 ○此 此。 ○哉 哉。 ○亦 亦。 ○土 土。 ○變 變。
- 參 參。 ○盖 盖。 ○默 默。

■ 訳注

● 本文（いわゆる旧字体とし、一行毎に改行した）

重關茶場碑記

前縫殿頭松平定常題額

州北河越之野、有狹山。

跨于多磨入間二郡、古出名茶。

傳言、釋榮西嘗入宋、逮建久中、歸國。

携茶種、始蒔之筑前背振山。

至其徒高辨、普殖之畿道。

相地之宜、定爲五場。河越其一也。

然而歲月之久、茶戸衰替、佳種蕪沒於灌莽深荊之間矣。

其他各場、培養失法、製亦不精。

惟宇治、擅其名、爲諸州之冠而已。

逮文政中、郷之著姓村野氏盛政、吉川氏温恭、江戸山本氏徳潤、胥議、

重關場于狹山之麓、欲以興數百年之廢。

鄰曲爲之、隨種者數十戸、用力培植、逐次蕃滋。歲收若干斤。

佳稱日著、製益精絶、而狹山之産復再彰於今云。

屬者、郷民介上田文吉、需予記其事。

予素有陸盧之嗜。心喜其舉。

乃謂、茶之爲物、蘊風露清虛之粹、鍾雲山奇秀之精。

滌昏破悶、驅睡解醒、滋味甘香、其功不爲少。

羅景倫曰、於務學勤政、未必無助。

蘇子瞻曰、煩膩既去、而脾胃不凡。

二公之語、洵爲知言。

然則、不特風騷之賞、雖紆青拖紫之輩、亦不可一日無此味也。

豈與彼種種釀酒、令人華狂而葉病者、可同日而語哉。

自今以後、一郷子孫承繼不墜、益殖其産、則狹山之種、將不讓宇治。

而三人者之名、亦與谿山共傳悠久也不疑已。

抑夫土宜之興廢、雖隨時而變、然人力之勤惰、實參存於其間焉。

吾未知今日之舉、果爲永傳乎。

若其必欲永傳也、則蓋在爲其子孫者、以人力保之矣。

姑識歲月以俟。

天保三年龍集玄默執徐清和月

林樵撰文

卷大任書

窪世昌刻

● 訓詁

重ねて茶場を關ひらくの碑の記

前の縫殿頭 松平定常題額

州の北河越の野に、狹山有り。

多磨入間の二郡に跨がり、古名茶を出す。

傳へて言ふ、

「釋榮西、嘗て宋に入り、建久中に速およんで、國に歸る。

茶の種を携へ、始めて之を筑前の背振山に蒔く。

其の徒高辨に至りて、普く之を畿道に殖うう。

地の宜しきを相みて、定めて五場となす。河越其の一なり」と。

然りして歲月の久しく、茶戸衰替し、佳種、深荊の間に蕪没せり。

其の他の各場は、培養は法を失し、製も亦た精ならず。

惟だ宇治のみ、其の名を擅ほしにし、諸州の冠となるのみ。

文政中に速んで、郷の著姓村野氏盛政・吉川氏温恭、江戸の山本氏徳潤、胥ともに議し、

重ねて場を狹山の麓に闢き、以て數百年の癢を興さんと欲す。

鄰曲之がために、隨ひて種うる者數十戸あり。

力を培植に用ひ、逐次に蕃滋して、歳に若干斤を収む。

佳稱日に著あらはれ、製も益々精絶たり。

而して狹山の産、復た再び今に彰あらると云ふ。

屬このころ者、郷民、上田文吉を介して、予に其の事を記せんことを需もとむ。

予、素より陸盧の嗜たしなみ有り。心に其の擧を喜ぶ。

乃ち謂おもふ、

「茶の物たるや、風露清虚の粹を蘊たくはへ、雲山奇秀の精を鍾あつむ。

昏を滌はひ悶を破り、睡を驅り醒を解き、滋味甘香にして、其の功少なしとなさず」と。

羅景倫曰く、

「務學勤政において、未だ必ずしも助け無くんばあらず」と。

蘇子瞻曰く、

「煩膩既に去つて、而して脾胃凡ならず」と。

二公の語、洵まことに知言となす。

然れば則ち、特ただに風騷の賞のみならず、紆青拖紫の輩と雖も、亦た一日として此の味無かるべからざるなり。

豈に彼の秫を植えて酒を醸し、人をして華狂にして葉病ならしむる者と、同日にして語るべけんや。

自今以後、一郷の子孫、承繼して墜とさず、益々其の産を殖ふやせば、則ち狹山の種、將に宇治に譲らざらんとす。

而して三人なる者の名も、亦た谿山と共に悠久に傳はらんこと疑はざるのみ。

抑々夫の土宜の興廢は、時に隨ひて變ずと雖も、然れども人力の勤惰、實に其の間に參存す。

吾、未だ今日の擧の、果して永く傳はるかを知らず。

若し其れ必ず永く傳はるを欲せば、則ち蓋し其の子孫たる者の、人力を以て之を保つに在

り。
姑しばらく歲月を識し、以て俟またん。

天保三年龍集玄黙執徐清和月、
林燿、文を撰す。
卷大任、書す。
窪世昌、刻す。

●人物

○松平定常 池田定常。明和四（一七六七）年から天保四（一八三三）年。旗本池田正勝の次男として江戸で生まれる。因幡国若桜（西館）藩四代定得に世子がなかったため、養嗣子となり、安永二（一七七三）年に七歳で家督相続。天明六（一七八六）年に従五位ぬのかみ縫殿頭に叙任。享和元（一八〇一）年に病と称して致仕し（三十五歳）、嫡男定興に家督を譲る。この段階で縫殿頭も返上。前縫殿頭となる。隠居後は冠山と号し、林述斎・佐藤一斎・松崎慊堂・谷文晁・司馬江漢・市河米庵・太田南畝・塙保己一・大窪詩仏ら、当時一級の文化人と親交を結び、毛利高標（豊後国佐伯藩）・市橋長昭（近江国仁正寺藩）らと共に「柳間詰の文芸三侯」（寛政の文学三侯）と称された。「重鬮茶場碑」を揮毫したのは、六十五歳、没の一年前。

○釋榮西 保延七（一一四一）年から建保三（一一二一五）年。字は明庵。備中の人。比叡山で天台密教を学び、仁安三（一一六八）年と文治三（一一八九）年に入宋。宋では主に禅を学び、二度目の入宋後の建久二（一一九一）年に帰国すると、同六（一一九五）年に博多に日本最初の禅道場である聖福寺を建立し、日本禅宗の開祖となった。中国から茶葉を持ち込み、喫茶文化をもたらしたとされ、茶の効用などを説いた「喫茶養生記」を記したとされる。

○高辨 承安三（一一七三）年から寛喜四（一一三二）年。字は明恵。紀州の人。文治四（一一八八）年に十六歳で出家し、華嚴教学や禅を学んだ。のち世俗から離脱した遁世僧となり、各地を遍歴しつつ、修行と布教につとめる。建永元（一二〇六）年に、後鳥羽上皇より梶尾に土地を賜り、高山寺を再興した。本碑文にも記されているが、栄西将来の茶の種子を日本国中に広めたと伝えられるが、歴史的事実であるかどうかは確認できない。

○村野盛政 明和元（一七六四）年から文政二（一一八九）年。不詳。

○吉川温恭 明和四（一七六七）年から弘化三（一八四六）年。不詳。

○山本徳潤 江戸の茶肆の山本家のひとりだろうが、不詳。

○上田文吉 不詳。

○陸 陸羽。生年不明、八〇四年没。唐の復州竟陵（湖北省）の人。別名、疾。字は鴻漸、季疵。出自不明で、上元初年（七六〇）頃、苕溪（浙江省）のほとりに廬を結んで文人達と交流したが、仕官はしなかった。茶を好み、「茶経」三巻がある。茶道の元祖とされ、神格化されている。「新唐書」巻一九六本伝。

○盧 盧仝。生年不明。八三五年没。唐の范陽（河北省）の人。号は玉川子。学を好み博覧で、詩に巧みであった。仕官の意志がなく、嵩山の少室山に隠棲した。性、茶を好み「走筆謝孟諫議寄新茶」（「全唐詩」卷三八八）の詩は、「七碗茶歌（詩）」として知られ、お茶の味わいと効能とを歌ったものとして後世に伝えられた。「一碗喉吻潤（一杯目は喉を潤し）」から始まり、「五碗肌骨清（五杯目では皮膚や骨が清らかになり）」「六碗仙靈（六杯目では神仙に通じる）」とし、「七碗吃不得也（七杯目は飲めなかった）」としている。

「新唐書」卷一七六本伝。

○羅景倫 生没年不詳。宋の廬陵（江西省）の人。諱は大経、字は景倫。ほぼ寧宗嘉定末（一二二四）年ごろ活動した。著に、人事から自然のことまで、さまざまな事象について考察を行った「鶴林玉露」十六巻がある。

○蘇子瞻 一〇三六年から一一〇一年。宋の眉山（四川省）の人。諱は軾。字は子瞻、号は東坡、諡は文忠。蘇洵の子で、古文復興の文章家である唐宋八大家のひとり。杭州知事時代に西湖に蘇公堤を築いた。官は礼部尚書に至った。宋代はもちろん、中国を代表する詩人・文人。料理などの文化的事象にも興味を持ち、東坡肉（トンポーロウ）は彼の發明だとされる。著に「蘇東坡全集」「東坡志林」などがある。

○林耀^{あきら} 寛政十二（二八〇〇）年から安政六（二八五九）年。林家八代述斎の第六子。書物奉行、西丸留守居役などを歴任、嘉永六（二八五三）年に本家を相続し、大学頭を名乗り、復斎と号した。全権の一人として、同七（一八五四）年の日米和親条約に調印。江戸時代の対外関係資料をまとめた「通航一覽」を編纂した。本碑文を撰文したのは、三十三歳、幕府官僚時代である。

○巻大任 安永六（二七七七）年から天保十四（二八四三）年。越後新潟の人。字は致遠、弘斎・菱湖と号す。大任は諱。学問と詩文は亀田鵬斎に学び、書はことに楷書をよくした。書体の淵源流伝を究めた「十体源流」の著がある。江戸で弟子を教授し、その門弟は一人を超えたといわれ、その書体は大変流行し、後世に影響を与えた。市河米庵・貫名崧翁とならんで、幕末三筆と称されている。本碑文を揮毫したのは、五十六歳のとき。

○窪世昌 生没年不詳。正しくは、大窪世祥で、名前は世昌、また世升とも書いた。江戸後期の石碑の石工。嘉津山清『江戸前の石工 窪世祥』（第一書房、二〇一六）によれば、その作品は、文化元（一八〇四）年から安政元（一八五四）年のものが確認されるという。大窪行（号詩仏）と巻大任の揮毫、及びその門下の揮毫を雋刻する際に、窪世昌が用いられていることが多いという。

●語注

○茶場 茶業農場くらしいの意味であろう。農場とは、茶葉の生産だけではなく、その精製・保存、製品としての出荷までをトータルに扱う。

○圃 開く、開闢。開設する。

○記 文章の種類のひとつ。事柄や情景などを描写するもの。石碑本体と題字が、籍碑の本質部分であり、記は「付記」として、石碑の由来などを説明するもの。

○州 武州、武蔵の国。

○建久中歸國 栄西は二度入宋しており、二度目の帰国が、建久二（一一九一）年。

○筑前背振山 背振山は筑前と肥前の境を頂上とする。筑前側の山麓に蒔いた、ということか。

○畿道 畿内と七道。日本全国ということ。

○相地之宜 相はそのものを見て、性質や本質を見抜くこと。手相などに同じ。

○茶戸 茶を栽培する農家。

○衰替 おとろえ、すたれる。

○蕪没 雑草にうずもれる。

○灌莽 茂った草木。あるいは、草深い原野。

- 荊 原野に密生するイバラ。
- 文政中 西暦一八一八年から一八三〇年。茶場再興をはかった村野盛政の没年が文政二年である。そうであれば、再興は文政元年から二年にかけてとなる。
- 著姓 有名な家柄。
- 胥 ともに。
- 鄰曲 隣近所。
- 逐次 順をおって、ひとつひとつ、日本での用法では「しだいに」。
- 蕃滋 ふえる。蕃殖する。
- 屬者 ちかごろ、このごろ。
- 茶之爲物云々 佐藤一斎「狭山茶場碑」にも「抑夫茶之爲物、生於山水秀麗之間、蘊乎風露清慮之氣」という近似した文がある。基づくものがあると思われるが、類似のものとして、宋徽宗「大觀茶論序」の「至若茶之爲物、擅甌閩之秀氣、鍾山川之靈稟（そもそもお茶というものは、その産地である甌（浙江省東部）や閩（福建省）の秀氣を存分に吸い、山川の靈性を聚め、胸のつかえを洗い流し、すがすがしく和やかな気をもたらす）」くらいしか探せなかった。学兄の教授を待つ。
- 蘊 積む、貯蔵する。
- 風露 風と露。
- 清虚 清らかでからっぽなこと。
- 粹 まじりけのない、純粹なもの。
- 鍾 集める。
- 雲山 雲のかかっている高く遠い山。
- 奇秀 めずらしくすぐれている。
- 解醒 混迷な状態を解除し、清醒にすること。清蒲松齡「雪夜同翟晴霞許聖瑞及兒孫小飲」に「合醉勿須辭飛觥、更有團茶能解醒（さあ酔おうではないか、決して飛び巡る杯を辞退してはならない、そうして更にお茶があれば酔いをさますことができる）」とある。
- 滋味 美味、うまい味。
- 羅景倫曰云々 羅大経「鶴林玉露」甲編卷三に「茶之爲物、滌昏雪滯、於務學勤政、未必無助（お茶というものは、暗いものを洗い流し、滯ったものを注いでくれる。学習や政務に従事する際に、手放せないものだ）」とある。
- 務學勤政 学習や政務に従事する。
- 蘇子瞻曰 「蘇軾文集」卷七十三雜記「漱茶說」に「每食已、輒以濃茶漱口、煩膩既去、而脾胃不知（毎食後かならず、濃茶で口をすすぐ。そうすると脂肪なども洗い流されて、胃もたれもなくなる）」とある。
- 膩 よごれ、あか、脂肪。
- 脾胃 脾臓と胃。消化器系の内臓をいうか。胃腸。
- 不知 意識をしない、ということか。もたれない、ということではないか。
- 知言 道理にかなった言葉。
- 風騷 風流を解する人士。
- 賞 賞味する。
- 紆青拖紫 印綬を身に帯びること。高い官位につくこと。
- 秣 もちきび。酒の原料となる。

○華狂而葉病者 酒に酔っ払ったもの。酔って目を大きく見張らしたものを「狂花」といい、眠たくなって目を閉ざしているものを「病葉」という。

○土宜 土地の性質。それと植物との適合性。

○參 かかわる、あずかる。

○天保三年 西暦一八三二年。

○龍集 一年。くの年。

○玄黙 十干の壬の別名。

○執徐 十二支辰の別名。

○清和 陰暦四月。

●口語訳（章立てと小見出しは訳者が便宜的につけた）

「もう一度茶場を開くの碑」の記

前の縫殿頭である松平定常が題額を書く。

【狭山とお茶の古い伝承】

武蔵の国の北部、河越の平野に、狭山という場所がある。

多磨郡入間郡の二郡に跨がっており、かつては名茶を産出していた。

伝承によれば次の通り、

「嘗て僧侶の栄西は宋に入り、建久年間になって日本へ帰国した。

彼はお茶の種子を携えて帰り、始めてこれを筑前の背振山に蒔いた。

その弟子の明恵高弁に至っては、あまねく日本国内に植えようとした。

土地の適合性を観察し、植える場所として五箇所を選定した。河越がそのひとつであった」と。

【茶業の衰退】

しかし、歳月が長く経つ内に、茶業に携わる農家は衰え廃れ、よい種株も茂った草木や深い荊の中に埋没してしまった。

ほとんどの茶場が、栽培方法も手本を失い、精製方法も精密ではなくなってしまった（茶業が廃れてしまった）。

その中で、唯一宇治だけが、茶所としての名声を独占し、国内諸州のトップの位置を占めていた。

【狭山茶復活の取り組み】

しかし、文政年間になると、狭山宮寺郷の有力者である村野盛政氏と吉川温恭氏とが、江戸の茶商人山本徳潤氏とともに協議して、もう一度茶場を狭山の麓に開き、数百年にわたって荒廃していた茶業を再興しようと考えた。

近隣の農家もこれに協力し、数十戸がお茶を植えて育てることになった。

そしてお茶の栽培に力を注ぎ、茶畑も次第に盛んになり、一年に若干斤の収穫を得るに至った。

よい評判も日に日に明らかとなり、お茶の製法も益々精密になってきた。

かくして、狭山産のお茶の名が、再び現在においてよみがえることとなった、という。

【石碑の依頼】

ちかごろ、吉川氏らが、郷民の上田文吉を仲介として、私にこれらの事柄を「記」とし

て記すことを依頼してきた。

私はもともと、お茶の名人である陸羽や盧仝と同じ嗜好を抱いていた。そこで、この茶場復活の事業をとでもうれしく思った。

【お茶の効能について】

そこで私は考えた、

「お茶というものは、風と露の清らかで純粋なものをその中に蓄えており、雲が懸かった山のすぐれたエッセンスを集めているものだ。

暗く混乱した気持ちを洗い流し、煩悶を打ち破り、眠気を一掃し、混迷なところを清浄な状態へと導いてくれる。しみじみとうまみがあり、甘く香り高くて、その効能たるやとても少ないとはいえないものだ」と。

羅大経は言っていた、「(お茶は、暗い気持ちを洗い流してくれるので)学問をしたり政務を執ったりする場合において、おおいに助けとなってくれるものだ」と。

また蘇軾は「(食事後にお茶で口を漱ぐと)煩わしい脂肪分も流れ去ってさっぱりとし、胃腸ももたれなくなる」と言った。

この二先生の言葉は、誠に正鵠を得ていると言えよう。

そうであれば、お茶はただ風流の士達だけが賞味するものではなく、高位高官として公務につくもの達にとつても、一日たりとも味わわれないわけにはいかないものだ。

それはあの、もちきびを植えて酒を醸し、人を酔っ払わせてしまうものなどとは、同じレベルであつかうことはできないものなのである。

【これからの狭山茶の隆盛】

今以後、狭山の郷の子孫たちが、この茶業を継承して落とすこと無く、ますますその産業を盛んにしていけば、狭山のお茶も宇治に劣らないものとなることができるだろう。

そして、狭山茶を復活させた村野・吉川・山本三者の名声も、この狭山の山川が永遠に続くのと同じように、悠久の未来にまで伝わることは疑いないだろう。

そもそも、土地の地質の善し悪しは、時代によって変化せざるを得ないものだが、従事する人間の努力精進は、そうした変化に対応できるものなのだ。

【今後への期待】

私には、今日の狭山茶再興の事業が、果たして永く伝わるかどうかは分からない

しかし、きつと永く伝わることを望むのであれば、それは子孫達が努力精進して茶業の繁栄を続けることこそがその道であろう。

ここに、今日の日を記録しておき、今後の成否を待つことにしよう。

天保三年、壬申の年、四月、

林樵が文章を撰述した。

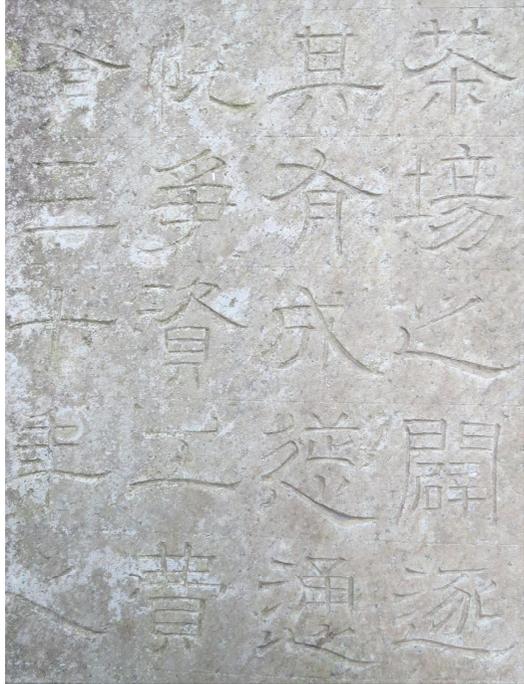
卷大任が字を書いた。

窪世昌が篆刻した。

(背面) ……建碑に携わった人名が列記されているが、ここでは省略した。
 ○写真4 背面全体



○写真5 「碑記」部分(隸書体)



■翻刻
 ●記

茶場之關逐漸繁殖三十餘年之閒茶戸已有三十二矣鄉有山人玄逸者嘉
 其有成愆憑隣曲立豐碑告後昆以庶幾永世繼續無墜其業也於是闔戸欣
 悅爭資工費今茲丙申碑刺畢功而山人不及見之墓已宿草生矣余於山人
 有三十年之舊回志緣由以寄歎慨云
 菱湖卷大任

*異体字

○場 場。 ○愆 愆。 ○刺 刻。 ○回 因。 ○寄 寄。

■ 訳注

● 本文（いわゆる旧字体とし、一行毎に改行した）

茶場之闢、逐漸繁殖。

三十餘年之間、茶戸已有三十二矣。

郷有山人玄逸者。

嘉其有成、憇憇隣曲、立豊碑告後昆、以庶幾永世繼續無墜其業也。

於是闢戸欣悦、爭資工費。

今茲丙申碎刻畢功。

而山人不及見之、墓已宿草生矣。

余於山人、有三十年之舊。

因志緣由、以寄歎慨云。

菱湖卷大任

● 訓訳

茶場の開きてより、逐漸に繁殖す。

三十餘年の間に、茶戸已に三十二有り。

郷に山人玄逸なる者有り。

其の成る有るを嘉し、隣曲を憇憇して、豊碑を立てて後昆に告げ、以て永世に繼續して

其の業を墜とすこと無きを庶幾ふ。

是において闢戸欣悦し、争ひて工費を資く。

今茲に丙申、碑刻、功を畢ふ。

而して山人、之を見るに及ばずして、墓は已に宿草生ぜり。

余の山人におけるや、三十年の舊有り。

因りて緣由を志し、以て歎慨を寄すと云ふ。

菱湖卷大任。

● 人物

○玄逸山人 不詳。

● 注

○逐漸 だんだんと、次第に。

○憇憇 勧め励ます。

○闢戸 語句の意味としては、戸を開ざす。それでは意味が通じない。闢郷で、村をあげて、の意味がある。あるいはそちらの意味か。

○資 資金援助をする。

○丙申 表面の碑文の撰述が、天保三年壬辰。その少し前に、玄逸山人が提唱した建碑計画がもちあがったのだろう。そして撰文を経て、石碑が完成したというならば、丙申は、天保七（一八三六）年となる。その数年前、建碑を見る前に、玄逸山人は逝去したのであろう。

●口語訳

狭山に再び茶場が開かれてより、次第に繁殖するものが広がってきた。三十年たった現在では三十二戸にまでなった。

わが狭山郷に玄逸山人というものがいた。

茶業が成就していることをよいことと思い、近隣のものを勧めはげまして、立派な石碑を建てて後世の者に告げ、永くそのことを伝えることを通して、後の者達がこの事業をおとってしまうことのないようにしたいと願った。

かくして郷をあげて喜び賛同して、建設資金を援助したのだった。

そして今、天保七年丙申の歳に、石碑は完成した。

しかし、呼びかけた当の本人である玄逸山人は、それを見ることなく、亡くなってしまい、そのお墓は最早苔むしている次第である。

私は山人とは三十年にわたる旧友であった。

そこで、ここにこの間の経緯を記して、彼を悼み、またその事業を慨嘆する思いを寄せるのである。

卷大任菱湖が記す。

三. 参考資料

①本文翻刻

・瑞穂町『瑞穂町史』(一九七四)

・入間市『入間市史』中世史料・金石文編(一九八三)

②翻刻並びに訳注(「素読」として訓読し、「俚読」として和語をとりまぜた訳)

・沢田泉山『入間碑集』(明治三(一八七〇)、私家版)、所沢市史編さん室『入間碑集―

所沢市史調査資料別集1―』(昭和五十三(一九七八) 翻刻。

③訓読ならびに解説

・大護八郎、埼玉県茶業協会著『狭山茶業史』(埼玉県茶業協会、一九七三)。

④関連碑文

・金子「狭山茶場碑」(「入間〇三」)

・宮寺「茶場後碑」(「入間〇四」)

・金子「北狭山茶場碑」(「入間〇五」)

・瑞穂「狭山茶場之碑」(「東京〇一」)

以上

二〇二四年七月、薄井俊二訳す